

# 図書だより

第63号  
令和3年3月26日  
呉工業高等専門学校  
図書館  
<https://www.lib.kure-net.ac.jp>



「帰り道」  
撮影者.. 機械工学科1年 神本彩花  
場所.. 阿賀小学校の横の道路

## 目次

・ 巻頭文 「サブスク時代」 .....	図書館長 田中 誠	2
・ 令和2年度校内読書感想文コンクールの表彰式 .....		3
・ 令和2年度（第17回）校内読書感想文コンクール 最優秀賞		
一筋の真実と強い友情による私の変化―「さぶ」を読んで― M有松 諭志 .....		4
優秀賞		
M神谷 健登 M平岡 耕我 M中尾 海人 E児島 智菜 E寺重 克飛 E山本 千紗 1年生の部 .....		5
C伊藤 ゆうき C宇川 陽樹 C大澤 晴也 A徳本 啓伍 A林 青空 A丸川 泰世 A宮本 知輝		
2年生の部 C唐木田 啓伍 .....		18
・ 講評 .....		19
・ 読書のすすめ 「フィクションで必要なのはリアリティである」 .....	機械工学分野 水村正昭	21
「英語のルーツをたどる」 .....	人文社会学系分野 周 躍	22
「十四日間の積読」 .....	自然科学系分野 堀内 遼	23
・ 図書館からのお知らせ 貸出回数上位ベスト20 .....	図書館	24
・ 編集後記		

## 巻頭文

## サブスク時代

図書館長 田中 誠

毎月定額料金で、音楽や動画、電子書籍が聴き放題、見放題になる「サブスクリプション」と呼ばれる配信サービスが当たり前になって久しい。聴きたいときに、その都度ダウンロードしながら聴くのでメモリを占有することもなく、スマホを機種変して失うこともない。楽曲を所有することなくひたすら消費し続ける楽しみ方である。インターネットの仕組みを知らなければ、大量のパケットが目まぐるしくインターネット回線を占有しているという心配もしなくてよい。

音楽や動画に比べ、電子書籍の利用はこれまで紙の出版物に比べてそれほど多くはなかった。しかしコロナ禍で、電子書籍化を認めてこなかった人気作家が電子化を解禁したことで、今後は増えて行きそうである。コミックが占める割合が高い大手出版社は、関連商品を含めると電子書籍の売り上げが紙の出版物を上回ったらしい。紙の出版物を扱う流通や小売り業者の行く末が心配である。

初等・中等教育の教科書は、かかる費用の面だけでなく「重すぎる」問題の解決のためにも、すべてが電子化されタブレットに収められて登校するのは、もはや時間の問題ではないだろうか。

紙の専門書は、学術的な価値があっても、売れる見込みがないと出版までたどり着くことはなかなか難しい。利益が出る最低部数を印刷しなければ元が取れないからだ。またせっかく出版された紙の専門書も、増刷されることはほとんど期待できない。出版されたときに買っておかないと二度と手に入れられなくなる本も多い。また「AI」など情報工学分野の専門書は、出版された頃には別の新しい手法が注目されていたり、新しいバージョンの登場で、記載されている内容が役に立たなくなったりする。本来部数が少なく、短期間に改訂を行う必要がある専門書こそ電子化の意義が大きいと思われる。

2020年10月に本校図書館は改修工事が終わり、リニューアル・オープンした。サービス形態は主に紙の出版物に対するものである。以前より eBook Collection(EBSCOhost)や Maruzen eBook Library, LibrariE の電子書籍サービスも行っているが、ほとんどが外国語の小説や語学学習用である(詳しくは図書館HPの「電子書籍」から)。サブスク時代の図書館は今後どのように変貌していくのだろうか。

**令和2年度 校内読書感想文コンクールの表彰式**

令和2年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、12月18日（金）に校長室で行いました。最優秀賞受賞者は、以下のとおりです。

機械工学科1年          有松 諭志

受賞者には、賞状及び後援会からの副賞（図書カード）を授与しました。最優秀賞の他にも優秀賞があり、今年度の受賞者は最優秀賞1名、優秀賞14名、計15名となりました。



校内読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で17回目になります。

学生は、学年ごとの課題に沿った図書を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。

次回もたくさんの応募があることを期待しています。



## 令和2年度（第17回）校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

なづな

山本 周五郎 著

機械工学科一年 有松 諭志

一筋の真実と強い友情による私の変化

——『なづな』を読んで——

異様に暗い川と、雨が強く橋に降りつけている絵がどこか重苦しい雰  
 囲気を感じさせている。そこにかかれた平仮名二文字の「さぶ」とい  
 うタイトル。私はこの表紙に強いインパクトを受け、手に取った。裏表紙  
 には「一筋の真実と友情を通して人間のあるべき姿を描く時代長編」と  
 かかっている。私は時代を強くとり込んだ作品が好きだ。それに主人公  
 ともさほど歳が離れていない。没頭できる。このようにして私は読書感  
 想文をこの本で書くこと決め、読み始めた。

読んでみて、「友情の凄さ」が多くとり入れられていると感じた。その  
 一つに人足寄場につれていかれた栄二をさぶが仕事の間を使い、探し出  
 した場面があげられる。身を削りながら一人の友人の為に通いつづけた。  
 後に栄二が人足寄場に送られた原因にさぶが絡んでいてその罪滅ぼしだ  
 ったと説明されるが、それがあってもここまで他人の為に頑張れないだ  
 ろう。

また、栄二が橋の上でさぶに言った言葉も印象に残っている。さぶは  
 どで仕事もできず、いつも糊の仕込みをしていたがついに我慢が出来  
 なくなつて抜け出してしまった。そんなさぶを栄二は雨の中にもかかわ  
 らず追いかけて「糊の仕込みで日本一になれば、それはそれで立派な職人

なんだ、おまえ日本一の糊作りになれよ」といった。そして、自分が自分の店を持った時  
 には糊を作ってくれと言った。一つのことを磨けばそれは強みになると言ってはげまし  
 ているのだ。

栄二がさぶに言ったこの言葉は将来、技術力の高さが求められる工業の世界で働くこ  
 とを目標としている自分にもささり、心に残っている。

この「さぶ」という話は人足寄場のことやそれ以外のことも合わせて、考えせられた  
 り、心に残ったりするものが多く存在した。

その中でもとくに印象的なものが先程の場面とあとの二つだ。

一つ目は、栄二が人足寄場にいるとき与平が栄二に言った言葉だ。「どんなに賢くつ  
 ても、にんげん自分の背中を見ることはできないんだからね」という言葉は、人間がいか  
 に弱くてどれだけ周りと助け合う必要があるかどうかということを意味している。初め  
 読んだ時は「この意味が分からずその場面の栄二と同じように考えた。しかし、あとから  
 その言葉の深さに気づき考えさせられた。

二つ目は、栄二が人足寄場を出たあとのことだ。古金櫛の切がおすえによって入れら  
 れたと知り、栄二はさぶの行動が罪滅ぼしではなく、本当に心配しての行動だったと知  
 る。このことにより、栄二は自分がさぶを助けていたのではなく、さぶが自分を助けてい  
 たと気づく。栄二がそのことを知って友人の大切さを感じた所がとても印象に残ってい  
 る。

私は、この本を読み終えた後、私には、この栄二とさぶのような関係を持っている人が  
 いたのだろうかと考えさせられた。私は人と話すことが苦手な上手に話せない。小学生の  
 とき、中学生のときには友達なんて卒業したら離れてしまうので必要ないと思ってい  
 いた。

しかし、こうして「なづな」を読んで友達の大切さを知り、同級生と友達にならなかつた  
 ことを後悔している。

今私がつまっているこの学校は中学生の時と比べられないほどの社会が形成さ  
 れている。私はこの五年間で助け合え、協力し合える友達をつくり、日々の生  
 活を有意義なものにしていきたい。

一冊の本によって私にこれだけの考えや思いを持たせてくださった「なづな」の著者の  
 力に感動した。今から七年後の自分と栄二の年齢が同じになった時にもう一度読み返し  
 たい。

## 優 秀 賞

1年生の部

## 地獄変

芥川 龍之介 著

機械工学科一年 神谷 健登

愛する勇氣

——「地獄変」を読んで——

作者芥川龍之介の幼少期、無条件の愛をくれる母親は存在しなかった。芥川は、生後間もなく精神を病んでしまった母親を見て育ち、母親から愛されずに幼少期の時を経た。そのような記憶が本書「地獄変」に表れているのではないだろうか。

良秀という年老いた凄腕の絵師がいた。細く痩せた体で異様に唇の赤い彼はとても卑しく、周りからは猿とまで呼ばれるほどだ。そのような彼だが、唯一の愛する者がいた。彼の美しい一人娘である。何故、彼は娘だけを愛することができたのだろうか。

愛は非常に漠然としている。愛を表現することは可能だが、愛そのものを確認することは不可能だ。故に、自分でさえ愛を見失うこともある。とても理解しがたいものが日常的に私たちの周りを取り巻いている。

世の人々は私を愛してくれてはいないだろう。が、私の両親は私を愛してくれているはずだ。同じ人間であるにもかかわらず、家族間だと殆どの場合そうなってしまう。自分の子供というだけで、簡単に愛せるということに私は疑問を抱いている。子供が凶悪な犯罪者になってもなお、愛し続ける親も少なくない。

愛するという行為は誰に対しても可能だと私は考える。どんなに最低な人間でさえ、愛されることがあるのなら、人間は誰をも愛することが可能なのではないだろうか。重要なのは自分がその人物を愛したいと思うか否かであろう。現に、私は嫌いであった家人に対して、気持ちを改めることができた。

嫌いなところを挙げるとたくさんあるその人に対して、私は愛を持って接することにした。嫌いな点には目をつぶり、気持ちを想像して共感し、会話が良いものとなるように心掛けた。すると、どうしたものか、嫌いではなくなったのだ。自分でも驚いたくらいだ。嫌いになるのは簡単だが、好きになるのもまた簡単なのかもしれない。

愛そうとしなければ、愛は生まれてこない。例え嫌いでも、愛そうとするから、自然の愛が湧き出てくるのだと私は考える。

しかし、愛は時に不幸を招くことがあるのではないだろうか。本書に愛の対比が書かれている場面がある。猿のような卑しい絵師の良秀と人間のように賢い猿の良秀がいた。良秀を馬鹿にする意図で、猿はそう呼ばれていた。いじめられていたその猿は良秀の優しい娘に助けられ、恩を感じたのか娘に付いて回っていた。娘を愛する人間の良秀、恩人を愛する猿の良秀、二人の良秀が同じ人物を愛していた。

牛車があった。その中には娘がいた。誰かがそれに火をつけた。この光景を見た父親である絵師良秀、猿良秀がいた。猿は娘を助けようとし、火の中に飛び込み、焼け死んだ。父親である絵師は唯、娘がもたえ苦しむ中焼け死んでいくのを眺めていた。

燃え盛る車の中で死んでいく美しい女性、良秀はこの光景を求めていた。良秀は製作途中の絵の中央に、その光景を描き大作を完成させた。しかし、罪の意識からか完成の翌日に首を吊ってしまった。命がけで助けようとした良秀、見殺しにしてまで絵を描いた良秀、どちらにも愛はあった。

この場面から、愛は簡単に捨てられるのだと私は考えた。心に決めれば、たとえ愛する娘でも見殺しにできるのではないだろうか。与えることも、それをやめることもできる。愛は自分の心次第でどちらにでもなりうる。私は考える。

愛することに何のメリットがあるのか、デメリットばかりかもしれないが、それでも人は誰かを愛し続ける。私はどんな人をも愛せる広い心を持ち続けたい。

## なめとこ山の熊

宮沢 賢治 著

機械工学科一年 平岡 耕我

生かし合いの中で

——「なめとこ山の熊」を読んで——

「おお小十郎 お前を殺すつもりはなかった。」小十郎を殺したあとに熊はこう言った。なぜ熊は、殺すつもりはなかった小十郎を殺したのだろうか。

小十郎は七人の家族を持つ熊撃ちの猟師であった。畑も持つておらず、木をとることもできず、里に行っても誰も相手にしてくれなかったことから、自分の家族のために仕方なく猟師をしていた。小十郎は憎くて熊を殺しているのではなかったため、熊を殺してはいつも申し訳ない気持ちでいっぱいだった。もし自分が小十郎の立場だったら、熊の気持ちなど考える余裕はなく、少しでも稼ごうと必死で銃声を鳴らしていたと思う。しかし、小十郎は熊を想い、話を聞いてやったり、殺すのを見逃してやったりした。小十郎は、自分の家族を養い育てる気持ちよりも、熊たちへの申し訳ない気持ちの方が強くなってしまっていたことが分かる。

文中に、小十郎が、出会った熊に自分が殺されなければならない理由を尋ねられるシーンがある。小十郎は「毛皮と肝を安く売るだけだが、生きるために仕方がない。草の実でも食べて死ぬのならそれでもいいような気がする。」と本音を漏らした。すると熊は、「二年間仕事を済ましたら、小十郎の家の前で死んでいてやるから、今回は見逃してくれ。」と頼んだ。その後熊は、小十郎にいきなり後ろから鉄砲で撃たれないことがよく分かっているように、後ろも見えないでゆっくりと歩いて行った。このシーンで、私は小十郎と熊との信頼関係が大きく見えたと思った。小十郎は熊に対する申し訳ない感情を抱いており、反対に、熊は小十郎の気持ちを十分に悟り、

互いの心が通じ合っていることが分かる。

その後熊と別れてからちょうど二年後、熊は約束通り、小十郎の家の前で死んでいた。その姿を見た小十郎は悲しく思い、思わず拝むようにした。小十郎はこの時、相当ショックを受けたと思う。少しでも熊たちの相談に乗り、どうにか生き延びてほしいという小十郎の思いが叶わなかったからである。

一月のある日、小十郎はいつものように熊撃ちをしていた。その時、不意に熊が現れ、小十郎は撃ち損じをして熊に襲われて死んでしまった。そして熊は、「おお小十郎 お前を殺すつもりはなかった。」と言いつつ放った。これは、小十郎が熊を殺すときによく言っていた言葉と同じだと感じた。

熊が、殺すつもりはなかった小十郎を殺してしまった理由は、「熊たち自身が生き延びるため」と考えた。しかし、それだけでないと私は思う。これに加えて、「小十郎を苦しい生活から解放してやるため」と考えた。熊たちは、長い間小十郎と「生かし合い」の関係を築いてきた。互いに殺したくて殺すのではなく、自分たちが生き延びるために仕方なく殺すという複雑な関係である。そんな中で、小十郎が苦しく、情けない気持ちで猟師をしていることを熊たちはよく理解していたと思うからである。熊たちは、「悪」として小十郎を殺したのではなく、小十郎を救うために「善」の意をこめて殺したのだと考えた。それは、最後に熊たちが山の頂上集まり、化石のようにじっと動かなかったシーンから読み取れる。

私はこの本を読んで、自分が何も考えずに生きていることに気付かされた。人間も動物も植物も全部、いのちがあり平等なはずなのに、生きていくためには自分以外の他者のいのちを奪わなければならない。私たち人間は毎日他者のいのちを平気で奪って生きている。案外、多くの人が忘れてしまっているこの大切なことを気付かせてくれる物語だった。そして、「いただきます」「ごちそうさま」の一言の重みを改めて感じられる物語だった。

## 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治 著

機械工学科一年 中尾 海人

本当のさいわいとは

——「銀河鉄道の夜」を読んで——

今回、僕が読んだ、この「銀河鉄道の夜」は宮沢賢治によって書かれた童話である。僕がこの本を選んだ理由は、鉄道好きでもあり天体好きでもある僕にとって一番

ぴったりの本であったから。

主人公であるジョバンニは漁業から帰ってこない父のことでクラスメイトからからかわれていた。家庭を助けるために、朝から晩まで遊ぶこともせず働いていたジョバンニは、毎日の疲れから、勉強にも身が入らず、いつも孤独感を感じていた。そんなジョバンニにも親友のカムパネルラがいた。ケンタウル祭の夜、ジョバンニは、丘の上の天気輪の柱の下で孤独を噛みしめながら寝そべっていた。その時、周りが急に明るくなり、気づくと銀河鉄道に乗っていた。

ジョバンニは、銀河旅行で沢山の亡くなった人々と出会い、人生の生きざまを学んでいった。「本当のさいわいは一体何だろうか」「自分の幸福と他人の幸福が対立した場合どちらを守るべきか」それは、僕にとっても難しい問題である。最初に停車した駅は、白鳥の駅であり白鳥座つまり北十字星のことである。そしてこの旅行の始まりである。終着駅のサザンクロス、南十字星と、前に述べた北十字星は、位置的に真逆になっており、始まりと終わりを表すことができる。つまり、人生の始まりから終わりを表しているのだと僕は考える。

白鳥の駅を出発した後、列車の中で鳥捕りに出会った。

その後、わしの駅に着いた。これはわし座のことである。

そこで氷山に座礁して沈んだ船で亡くなった青年たちに出会った。

青年は、子どもたちの命を優先して助けようとしていた。

そして列車は、サザンクロスに着く。ここで先ほど乗ってきた青年たちは降りる。

しかし、ジョバンニは降りようとせずにその先にある南十字座に近く天の川の光を遮る暗黒星雲、すなわち石炭袋に向かって走っていった。その時、カムパネルラは恐怖心を抱いていた。これは死に対しての恐怖とジョバンニと別れる恐怖である。

その後、ジョバンニは、元の世界に戻り、カムパネルラが川に落ちたザネリを助けて亡くなったことに気付いた。ジョバンニは、カムパネルラの代わりに、勇気をもって生きることを決心した。

「自分の幸福と他人の幸福」どちらを守るべきか。それは、日ごろから考えておくべきではなく、その場に遭遇した時に自分の本能で動くものではないだろうか。

彼らの宇宙旅行は、白鳥座から始まり南十字星で終わる。そして、旅行していた世界が幻想第四次の世界だということは、その二つの十字の石炭袋が出入り口と考えられる。

そしてこの天の川沿いを走る列車自体が、亡くなった人々を運ぶ三途の川を渡る船のように例えているようにも考えられる。

カムパネルラが消える際に「あすこにいるのはぼくのお母さんだよ。」と言ったことにより、一見周りから見ると、幸せそうなカムパネルラでも母親が亡くなっていて悲しんでいたことに気付いた。「本当のさいわいは一体何だろうか。」それは、悲しみを乗り越えた人が感じられる悲しみの出口が見えた時ではないだろうか。

二年前の一月二十四日、僕は、弟を亡くした。悲しみのトンネルは続いたが、弟の死から二年後の今年、一月二十四日、弟の命日の日に僕は、この学校に合格した。この合格は、僕と弟の特別なものになった。「銀河鉄道の夜」それは、人生において夜のように苦しいときもあるが、必ず苦の終着があることを気づかせてくれた。

## 老人と海

アーネスト・ヘミングウェイ 著

電気情報工学科一年 児島 智菜

老人はライオンの夢を見続ける

——「老人と海」を読んで——

ヘミングウェイの「老人と海」は、サンチャゴという老人が海上で魚と闘う話だ。私は小学生の時に初めてこの本を読んだが、内容がてんで分からず、つまらない話だと思ってしまうていた。しかしこの度、再び「老人と海」を読んで、その文章に引き込まれると同時に、「なぜサンチャゴは何が起きても諦めないのか？」という疑問をもったので、考えてみることにした。

漁師であるサンチャゴは、魚の釣れない日々が八十四日も続いていた。そんな一人で出かけた小舟で、かじきのような大魚と闘い、ついには仕留めることに成功する。ところがそれを嗅ぎつけた鮫に襲われ、何度も闘うが最後には魚は丸ごと無くなってしまう。私はこの本をサンチャゴの立場になって読んでみたが、自分は絶対にサンチャゴのようににはできないと思った。それは、サンチャゴが決して諦めることがないからだ。八十四日の不漁や、魚との数日間にあつた闘い、鮫に襲われてどんどん減っていく魚の肉。サンチャゴには幾度となく諦めてしまいたいような場面が訪れる。しかし彼は決して諦めない。また、サンチャゴはびっくりするほどに海の男だ。サンチャゴの「俺は、魚を獲るための生まれてきたんだ」という言葉や、海を「フ・マール」と呼び愛するところなどから、漁師としての誇りや、海への大きな愛を感じる。これらのことから私は、サンチャゴは、生まれながらの漁師であり、単純明快に勝ちに拘る人間なのだと考えた。だから、決して途中で諦めようと思わないのだと思う。

私は、あまり勝ちに拘れず、そんな自分を少し苦手に思っている。中学時代、私は吹奏楽部に所属していた。部活全体の目標としては、コンクールでゴールド金賞を取ることだったが、私自身は楽しめたらそれでいいのではないかと思ってしまう節があった。自分の努力が続けられない性格もあり、コンクールまでの努力は、自分の全力を出し切れたとは言えなかった。そして、コンクールでゴールド金賞が取れなかったとき、周りが悔し泣きをしていても、そこまで心が揺さぶられない自分が嫌だと思った。しかし、そんな自分が嫌だということは、サンチャゴのようなひたむきな努力家になりたいという思いが、自分の中にあるのではないかと思う。私がこの本を読んですぐにサンチャゴのようになることはないけれど、サンチャゴは理想とするにふさわしい人間だと思った。

しかしここで、サンチャゴのように諦めない精神を持つていても、結局はサンチャゴの最後のように努力が水泡に帰ってしまうのではないかと新しい疑問が出てきた。だが少し考えてみるとすぐにそれは違うことが分かった。サンチャゴのつた魚は食べられてしまったが、サンチャゴの傍らには、親の言いなりならずサンチャゴといることを選んだ成長した少年が残ったからだ。それに、誰に見られていなくても、努力が泡になり誰に認められることもなくても、ライオンの夢を見続けるサンチャゴの精神こそとても大切で、必要なものだと思った。サンチャゴの考え方が、この「老人と海」の物語の中で変わることがないように、サンチャゴは死ぬまでずっと、変わらぬ強い闘争心と仕事への誇り、海への愛をもって生きるのだろう。私はそれを見習いたいと思う。

「老人と海」を読み、サンチャゴの生き方を考えたことで、彼は、まっすぐに勝ちを求め、仕事に誇りをもっていることが分かった。私も、彼のように、今の自分の役割に誇りを持ち、もつと意欲的に、諦めない心を持ちたいと思った。そして、いつまでもライオンの夢を見続けられるような大人になっていきたい。



## 人間失格

太宰 治 著

電気情報工学科一年 寺重 克飛

普通と異常は紙一重

——「人間失格」を読んで——

「普通」とは何なのか。最近、物事や考えに対し、なにもかも否定されることが多い気がする。自分が普通だと思っていることを基準とし、その基準から離れている部分があると否定するのだ。一般人とは違うぞれた考え方をすると、その人は周りの人たちから非難をされなければならないのか。

「人間失格」の主人公は葉蔵という。葉蔵は物心ついた頃から周りの人と感性が違った。駅にある橋が線路をまたぐためではなく、汽車を見るためにあると思っていたり、空腹を感じたことがなく、空腹感から食事をしたことがなかったりしたのだ。そんな、人間の営みの分からない葉蔵は「道化」となり、自分とうそをつき、誰かの気に障ることのないように周りに合わせながら生活をしてきた。道化になるという選択をするような葉蔵には、自分の意志というものはなく、誰かに道化が暴かれるのではないかとおびえながら、常に苦しい思いをしていた。こんな性格である葉蔵は、生きる目標が見いだせず女性と心中未遂をしたうえ、酒と薬物に溺れ、最終的に脳病院に送られる。葉蔵は病院の中で自分のことを「人間失格」というのであった。

葉蔵の常識と周りの人の常識、この二つに大きなずれがあるだけで葉蔵はとても悲しい人生を送った。

もし、もっと少数派の意見が尊重される世の中だったら、葉蔵はこんな思いをせず、幸せに生きることができたのではないか。私が大勢の人が持っている考えとは

別の考えを持っていたら、「自分は間違っているのではないか。」「変な目で見られてしまうのではないか。」と思い、自分の考えをしまつて、葉蔵のように周りに合わせにくくと思う。実際に多数決で自分の意思に反し、多くの手のあがった方に合わせて手をあげた経験が多々ある。葉蔵は一般人とは大きく異なった思考をしていた。すなわち少数派の身であったため、周りに合わせにいき、自分自身の意思ではない「道化」という道を進み、生きる目標を失い、ボロボロな人生をたどってしまったのだと思う。自分の意思を持つこと、一般的で「普通」だと思われている意見に流されず生きていくことが必要だと感じた。

心中未遂をしたり、酒や薬物に溺れたりした葉蔵を作者は「人間失格」だと考えている。しかし、私はそうは思わない。葉蔵は人を愛することができ、周りの人とは違う感性であっても考えを持つことができるからだ。また、その感性を使って思考をすることが、葉蔵にとつての「普通」だからだ。自分は一般的ではないから「普通」ではないと考えることは、あまりに安直だと私は思う。自分の考えていることからさらに幅を広げ多数の意見に耳を傾け、一度肯定することで、自分が基準だと思っていたことの枠をこえたことを理解できるのではないかと思う。

異常な思考を持ち、煙草や酒、薬物を投げ所とし、次々と壊れていく哀れな主人公に私は強く心を動かされた。何が人間としての「失格」なのか。逆に何が失格ではなく「普通」なのかを深く考えさせられた。「普通」とは幅広いもので、そう易々と定めてはいけないものだと私は思う。「普通」という基準があり、自分はその基準からずれているから「普通」ではないと捉えるのではなく、そういう考え方もあったのかと、別の考え方を真摯に受け止め、それぞれ違った、「普通」という基準が定められるべきだと思う。葉蔵の人生も「普通」、自分の人生も「普通」と考え肯定し合うことにより、「人間失格」になる人がいなくなると思う。

これからは、少数派の意見をより尊重するようにし、自分の考えている世界だけではなく、多方向の意見に対して、積極的に向き合い、肯定し、真摯に受け止めていきたいと思う。

## マクベス

ウィリアム・シェイクスピア 著

電気情報工学科一年 山本 千紗

泡のように消える

——「マクベス」を読んで——

私はシェイクスピアの「ハムレット」が好きです。昔から絵画が好きだった私がシェイクスピアに出会ったのはミレー作の絵画「オフィーリア」がきっかけでした。「オフィーリア」に魅せられて、いざハムレットを読んでみると想像以上に興味深い作品でした。今回、読書感想文を書くにあたってシェイクスピアの他の作品を読んでみようと思い、マクベスを読むことにしました。

「マクベス」は、「ハムレット」と並び、シェイクスピアの四大悲劇のひとつです。本作は、この作品の題名でもあり、スコットランドの優秀な將軍でもあるマクベスが運命に翻弄される物語です。マクベスは、ある日三人の魔女に出会います。彼女たちは彼に、昇進とやがて王になるだろうという予言を残します。実際に昇進が決まり予言が真実となったため、マクベスは野心にかられ国王になりたいと望むようになりまます。そしてマクベスは予言のことを知ったマクベス夫人にそのかさかされ、王であるダンカンを暗殺してしまいます。望み通り王となったマクベスでしたが、王という地位を失う恐怖から次々と殺人を重ね、多くの恨みを買ってしまいました。挙句の果てにマクベスは復讐され、死んでしまうというお話です。

この話で私が興味深いと感じたところを二つ述べたいと思います。一つ目は王の暗殺についてです。王になると予言され、いつになるかはわからずとも王になる事が確定しているにもかかわらず、予言が早く実際に起こるように王の暗殺を企てたのは実に人間の欲深さを物語っていると思えました。私が実際にマクベスの立場で

あったら、きつと私も周到な計画のもと国王ダンカンを殺害していたと思います。このことから、シェイクスピアは望む幸せが少しでも早まるのなら多少のリスクを負うとしても欲望に従ってしまうという人間の醜さを綴っていたのだらうと思えました。もしかしたら魔女は欲望の末の殺害さえも予知しての予言だったのかもしれない。

二つ目は、物語の後半、予言の言葉あそびです。魔女は二度目の予言でマクベスにこう言います。「女の股から生まれたものはマクベスを倒せない。」「森が進撃してこない限り安泰だ。」と。どちらも普通に考えればありえない事であり、マクベスは安心していました。しかし、マクベスを討ったマクダフは帝王切開で生まれており股から生まれていないし、森の進撃はマクダフたちの軍が木々をまとって進行してきた様が見えただけでした。これによりマクベスは討たれる訳ですが、私はこの言葉の隙間を突いていく様に思わず感嘆してしまいました。壮大な物語にこういった言葉あそびを入れてくるところににより物語を面白く感じさせられました。

シェイクスピアの名言に「今望んでいるものを手にして、何の得があるのか。それは夢、瞬間の出来事、泡のように消えてしまう束の間の喜びでしかない。」というものがあります。

マクベスは、王の位という得こそあったものの、その位も瞬間にして消えていってしまったため、この物語の言いたかったことの一つにこの名言が関係しているのだらうと考えました。欲望に吞まれて、驕ったマクベス。私はこの物語を読み、一時の望みだけで考えず、時間をかけて冷静に判断し、望みを現実のものにしていくという努力が必要だと考えました。何事も一足飛びにうまくはいかない、しようとしてはいけないと胸に刻んでこれから生活していきたいと思えます。

## 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治 著

環境都市工学科一年 伊藤 ゆづき

「さいわい」の在りかとは

——「銀河鉄道の夜」を読んで——

私がどうしてもこの話を読もうと決めたかという、幼い頃に読んで、なぜか分からないが強く印象に残ったことは覚えていて、成長した今、改めて読めば、強く印象に残った理由が分かるのではないかと思ったからだ。

この話は、ジョバンニという少年と、彼の友人であるカムパネルラが銀河を駆ける不思議な鉄道に乗り、その中でいろいろな場所へ行ったり、人々と関わったりする話だ。ジョバンニは、母が病氣のために、毎日朝、夕働きに出ている、ザネリといういじわるな少年にからかわれ、毎日辛い思いをしていた。そんな彼にとって、カムパネルラは父のことだからかかってくることもなく、ただ一人の親友といえる存在だった。

この話の主題ともいえる「ほんとうのさいわい」とは何なのだろうか。

ジョバンニとカムパネルラは、銀河鉄道の中で、「みんなの幸のためならば僕のからだなんか百ペン灼いてもかまわない。」と話している。実際、カムパネルラはザネリを救うため、川に入り、からだを灼いた。彼らにとって、人を救うために命を落とす、言えは失うことが本当に「ほんとうのさいわい」だったのだろうか。

もう一つ、ジョバンニにとつての幸いとして、遠く北の海に出ていた父が家に帰ってくるという便りがあったとある。これは、先程の「さいわい」とは違い、待ちに待った父が戻る、言えは得ることが「さいわい」としてはいる。

この二つは、似ている部分もあるが、失うか得るかと言うと、真逆だと思う。で

は、どちらが「ほんとうのさいわい」なのか、私にはまったく見当がつかない。

ジョバンニは、人の幸せのためからだと灼いていい、と言っていたが、親友がザネリのためにそうしたこと、彼は大切な親友を失うことになった。自分が「さいわい」と考えていたことで、悲しみを感じたのだ。逆に、待ち続けた父が戻ってくることは、もちろん「さいわい」だっただろう。それでは、得るとするのが「ほんとうのさいわい」だったのか。でもジョバンニは、みんなのためなら体を灼いてもいいと言っていた…。やはり、私には見当もつかなかった。

では、結局「ほんとうのさいわい」とは、何なのだろうか。

私は、人それぞれなのではないかと思う。当たり前なことではあるが、ある物事に対し、それを幸いととるか、そうではないととるかは人それぞれだ。だから、「ほんとうのさいわい」とは、一人一人の価値観であり、定義する必要も、元々なかったのだ。

私にとつて、「ほんとうのさいわい」とは、命があり、勉強して、趣味を楽しみ、またそれを共有する仲間がいるという環境にいられることだ。私には、カムパネルラのように、人のためからだと灼こうと決意できるほどの勇敢さはない。それは私に、失う勇気がないからだと思う。しかし、それがなくても、「さいわい」を感じられている。やはり、「さいわい」を定義する必要なんてないのだ。

結局、幼少期にこの話を読み感じた強い印象の理由は分からなかった。もしかしたら、私成長したことで、話のとらえ方や考え方が大きく変わったからかもしれない。これから、卒業、就職、結婚、出産…と様々な経験をし、人間として成長できれば、また私の中の「ほんとうのさいわい」は変わっていくのかもしれない。またいつか、この話を読み、どう考え方が変わるのかを楽しみに、今私が思う「ほんとうのさいわい」を大切に生きていきたいと思う。

## 銀河鉄道の夜

宮沢 賢治 著

環境都市工学科一年 宇川 陽樹

本当の幸せとは

——「銀河鉄道の夜」を読んで——

主人公であるジョヴァンニは、クラスでいじめを受けている。さらに、お母さんは寝たきりで家計を支えるために働いてお金を稼いでいる。小学生にも関わらず、このような状況におかれているジョヴァンニと、親切で幼馴染のカムパネラが銀河鉄道で色々な人に出会う。私はそこで、ジョヴァンニと同じように本当の幸せについて考えさせられた。本当の幸せとは他の人の幸せのために生きることなのか。僕にとって本当の幸せとは、他の人の幸せのために生きることと間違いないと思う。自らのために生きることと大切かもしれない。確かに、自分が死んでしまえば、何もかも失ってしまう。また、自らのために生きるとは、楽しい人生を歩むことにも繋がる。しかし、自らの幸せのためだけに生きると、この世に生きるみんなが平等に幸せに生きることができるのか。自ら一人が幸せになるのではなく、みんなが平等に幸せになるためには、他人の幸せのために生きることが一番であり、本当の幸せなのではないだろうか。

そのようなことを考えながら読み進めていくと、銀河鉄道から現実の世界に戻ってきて、親友であるカムパネラが死んでしまったことを知る。私はこの展開にも驚いた。川に落ちたザネリを助けたカムパネラが死んでしまったという。銀河鉄道で、本当の幸せについて考え、他の人の幸せのために生きると決めた直後、親友が人のために死んでしまったと聞いたジョヴァンニ。私だったら、生きることでも大変で親友を失い、どうしようもなくなくなり、カムパネラの後を追っていたかも知れない。

しれない。

この「銀河鉄道の夜」を書いた宮沢賢治が伝えたかったことは、他の人のために生きること、だと私は思う。銀河鉄道のことや、親友カムパネラの死を通して、幸せとは何か。生きるとは何か。この二つを考えさせられ、私はこれから、人の幸せのために生きようと思った。家族のため、友達のため、地域の人のため。私にもできることはたくさんある。人の幸せのために何かすることは、何よりも素晴らしいと思う。この本に出会えて本当に良かった。

最後に、この銀河鉄道の夜で最も印象に残った言葉がある。

「おっかさんは僕を許してくれるだろうか。」

カムパネラがザネリを助けるために、自分が死んでしまったことをお母さんが許してくれるかどうか聞いている場面である。私はこの言葉が心に響いた。人を助けることはとても素晴らしいことである。しかし、カムパネラの親にとってはどうだろうか。自分の息子の死を幸せと思えるのだろうか。私なら難しいと思う。やはり息子の命が一番だと思うことは、当然のことであるからだ。しかし、カムパネラは次のように言った。

「誰だって一番よいことをしたら幸いなんだね。だからおっかさんは僕を許してくれると思う。」

このとき私は、全く違うことを言うカムパネラに疑問を抱いた。しかし、よく考えたらカムパネラの言うことも分かる気がした。母にとっては、息子が生きてくれることも幸せだが、世のため、人のために行動することも幸せだと分かった。

本当の幸せについて考えてきたが、私にとって本当の幸せは、人の幸せのために生きることだ。これから何十年生きていくことになるが、人の幸せのために生きること、生きがいを感じ、自分も幸せになれると思っている。主人公のジョヴァンニの気持ちになつて、今まで家族や友人に幸せにしてもらった分、恩返しができるように生きていき、後悔しない人生を歩もうと思う。

## 人間失格

太宰 治 著

環境都市工学科一年 大澤 晴也

葉蔵の生き様から

——「人間失格」を読んで——

私が「人間失格」を読んで、心がゆさぶられたことは、「人間失格」を書かれている場面である。私がこの場面に心ゆさぶられたのは、葉蔵という主人公の二十七年間の人生を見たからである。資産家の家に葉蔵は生まれた。葉蔵は、小さい頃から人間が恐かった。そのため、道化を演じて、自分の本性を出さない性格だった。小学校、中学校では、成績優秀でクラスでも人気者だった。しかし、中学校に入ったところから、自分の道化がばれているのかと思うようになった。それから、自分の道化に気付いているのかと疑うようになり、おびえる毎日を送ることになる。東京の高等学校に進学するが、画塾で堀木と出会い、遊ぶようになり、高校を休むようになる。やがて喫茶店で出会った女とともに自殺をはかるが、自分だけ生き残ってしまう。葉蔵は学校を辞め、ヒラメという男の家に居候する。そして、マンガでお金をかせぎ、家出をするのであった。それから、ツツ子という女の家で生活を始めるのだが、自分はツツ子にとって邪魔な存在だと思ってしまう。そして今度は、バーを経営しているマダムのもとで暮らし、徐々に人は、恐ろしいものではないと感じだしていた。やがて、ヨシ子という女と会い、付きあい始める。彼女の疑いをもたない性格にひかれた葉蔵だったが、ヨシ子が不倫をしていることに気付く、自殺をはかるのであった。それから、薬物におぼれてかつての葉蔵とは思えないほど変りはってしまった。それから葉蔵は精神病院に入り、退院してからは、故郷に帰り、町はずれの家で廃人同様の生活を送るのであった。この壮絶な人生を知っ

て、「人間失格」という言葉の重さや苦しみや悲しさを体験することができた。また、葉蔵は、本当に辛い人生を送ってきたと強く感じた。最後の場面でマダムが言った「あのお父さんが悪いのですよ」という言葉には、強く共感した。葉蔵の生まれた家の環境が良かったら、葉蔵は、こんなにも苦しい人生を送ることはなかったと思う。そして、道化という自分をだまし続ける行為もしなかったと思うし、人を恐れ、疑う性格にもなっていないかと思う。その性格によって、自分の内面と外面での顔ができてしまい、それにずっと悩ませられ、それにより、人生が狂ってしまった。葉蔵には、もっと幸せで自分の本性をさらけ出せる優しい人と出会ってほしかったと強く思う。

私は葉蔵の生き様を見てこのようなことを思った。私も葉蔵と同じように自分にも内面の顔と外面の顔があるのではないか。普段の私は偽者ではないかと思った。葉蔵は、幼い時に、家庭の環境から、人間の本当の汚さや醜さから人という存在を恐れるようになり道化といった偽りの顔を作ってしまった。このような理由でなくとも、私も自分のプライドや我慢などから葉蔵と同じように、自分の本性ではなく、偽りの性格で生活しているのではないかと考えるようになった。しかし私は葉蔵のような環境とは違って、幸せで温かい家庭があり、自分の本音を受けとめ、聞いてくれる家族、友人がいる。このような環境はあたり前ではなく、とても感謝すべきことであると改めて感じた。また、このような環境だからこそ、今とても幸せで楽しい生活を送れていると再認識することができた。だから私は、偽りの顔ではなく本当の顔で生活できていると思う。

私はこの「人間失格」を読んで、人という存在の恐ろしさや怖さを知ったが、それと同時に、人の優しさや温もりを改めて学ぶことができた。葉蔵の人生は、辛く苦しいものだったが、それを知ったことで様々な気持ちや感情を体験でき、学ぶことも多くあった。私はこの本に出会えてよかったと思う。

## 老人と海

アーネスト・ヘミングウェイ 著

建築学科 一年 徳本 啓伍

人事を尽くして天命を待つ

——「老人と海」を読んで——

ヘミングウェイの「老人と海」は、キューバの老漁夫を描いた小説である。海外小説に疎い僕でも聞いたことがある本で、シンプルながら興味を引く題名にひかれて読み始めた。

「老人」と呼ばれているキューバの老漁夫「サンチャゴ」は、八十四日間も一匹も魚が釣れない日々が続いた。はじめの四十日間は一緒に漁に出ていた少年「マノリン」も、不漁が原因で親に他の船に移されてしまう。それでも老人は「きつと今日こそは。とにかく、毎日が新しい日なんだ。」と希望を持って手こぎの小舟で出港していく。僕はたった一人で、しかも不漁続きなのに、この希望はどこから湧き出てくるのだろうと思った。最初は諦めに似た強がりか、過去にとらわれた老人の過剰な自信なのではないかと、否定的な見方をしてしまっただけ。年を取り、昔とは同じように頭や体が動かないのに、若い時の感覚のままに行動してしまうというのは、現実でもよく耳にすることだ。また、孤独を深めて独善的な考え、行動に走ってしまうこともある。しかし、老人は違った。それは、老人が海を女性だと感じているところから感じ取れる。海を敵や仕事場、闘争相手と考えるのではなく、恵みを与えてくれたり、時にはお預けにするなにか、と考えている。独善的な人物ならば、八十四日も魚が釣れなければ、海を恨んでもよさそうなのだ。しかし、老人は不漁続きでも、海を恨んだりせず、運がついてないだけだと考えている。これは不漁を運のせいにしていないようだと最初は感じたが、よく考えてみると違う気が

してきた。老人は自分の経験、準備、技術に絶対的な自信を持っていたのだ。自分が最善を尽くしても、必ずしもうまくいくわけではない。むしろ、上手くないことの方が多いかもしれない。老人はそれを長い経験から感じていたのではないかと思う。まさに、「人事を尽くして天命を待つ」を忠実に実行しているように感じた。

そしてついに、老人の網に魚がかかった。しかも、約五・五メートルもある、老人の舟より巨大なカジキマグロだ。まさに、老人に運が向いてきた瞬間だ。老人はこの魚と四日間も死闘を繰り広げた。この戦いの最中の老人の心の動きが、老人の人となりをとてもよく表していると思う。「あの子がいたらなあ」と老人は繰り返し叫んでいる。自分の腕に圧倒的な自信と誇りを持ちながらも、少年がいてくれたら……という思いを持っている。とても潔いと思う。自分ももし老人の立場なら、同じように考えられるだろうか。自分一人でこの大魚を釣り上げて、他の人を見返してやると考えるかもしれないと思った。自分が自信を持っていることになればなるほど、他の人に助けや協力を求めることを自尊心が邪魔をする。自分の最も得意な分野で、素直に助けが欲しいと思えるのは、老人が自分の力を過信せず、しかも過小評価もしていないことを感じた。この後、四日間の死闘を制し、老人は魚を舟にくくりつけて港に帰っていく。しかし、そう簡単には帰ることができなかつた。鮫の襲撃を受けたのである。四日間もかけてやっと獲った魚を襲ってくる鮫を、老人は鉞で、ナイフで、棍棒で、必死に撃退し続けた。しかしその努力虚しく、カジキマグロは骨だけになってしまった。この場面は、読んで僕まで胸が苦しくなつた。もしも少年がいたら、もっと武器があつたら……と様々なタラレバが湧いてきて、悲しくなつた。

老人は、「人間は負けるようには造られていないんだ。」と言つた。失敗が続くと、何かのせいにしたくなる。しかし、時には運がついていなかったと割り切ることも必要かもしれない。そう言いきれないように、最善の準備、行動を尽くさなければならぬと感じた。

## 海と毒薬

遠藤 周作 著

建築学科一年 林 青空

「海」と私

——「海と毒薬」を読んで——

戦争という悲惨な出来事は二度と繰り返してはならない。私が広島県出身ということもあり、この類の言葉は小さな頃から幾度も聞いてきた。「海と毒薬」も、戦争を題材とした作品だと知り、関心を持った。そこに著されていたのは、現代を生きる人間にも通じるものがある、良心の在り処についてだった。

大学病院に研究員として勤める勝呂は、戸田と共に患者の治療をする日々を送る。しかし、二人の上に立つ橋本教授、浅井助手は患者を自分の出世のための足がかりとしか考えない。患者を実験台にし、自身の今後に関わるからと手術による死を隠蔽することも辞さなかった。外道な行為を何度も行う彼らに私は憤りを感じた。また人の命を軽視する教授や戸田の考えに疑念を持ち、患者の一人である「おぼはん」を精一杯看病していた勝呂に私は共感した。そんな勝呂は、生きた米兵捕虜の解剖という非人道的な実験への参加を持ちかけられ、迷いながらも諾了してしまう。

第二章に入ると、戸田の過去が明らかにされる。戸田は小学校時代から優秀な人間として生き、その裏では多くの悪事を働いていた。蝶の標本を盗む、その罪を他人になすりつける、高校時代に従姉と姦通するなど醜悪なものばかりだった。私は戸田にとつともない嫌悪感を覚えた。

しかし、それらの罪を暴露した戸田の手記にこんな記述がある。「なぜこんな手記を今日、僕は書いたのだろう。不気味だからだ。他人の眼や社会の罰だけにしか恐れを感じず、それが除かれれば恐れも消える自分が不気味になってきたからだ。」こ

の文に、彼の今までの悪行や人体実験への参加を許容した勝呂の心の全てが現れていると感じた。彼らは流されてしまったのだ。大きく荒れ狂う「世間」という海に。自分の心を押し殺し、世の中の悪い流れに従う道を選んだ。その文の後に、「あなた達もやはり、ぼくと同じように一皮むけば、他人の死、他人の苦しみに無感動なのだろうか。多少の悪ならば社会から罰せられない以上はそれほど後ろめたさ、恥ずかしさもなく今日まで通してきたのだろうか。そんな自分を不思議だと感じたことがあるだろうか。」私はこの問いを向けられ、ぞっとした。私は社会から罰せられないのをいいことに、自分の犯した罪に気付いていないのではないだろうか。気付いたとしても、全て忘れ去っているのではないか。そんな自分を不思議に思ったことなど二度もない。それは、既に無感情なまま世間に流されている証拠ではないだろうか。言い表しようのない底知れぬ恐怖に襲われた。

第三章では遂に捕虜の解剖が行われる。勝呂は殺人を目の前で見ながらも止めることが出来なかつた自分に苦しむ。戸田は良心の呵責を求め、無感動な自分に激しい胸の痛みを感じる。この戸田の胸の痛みは私が感じた恐怖と同じようなものであると思う。彼が自分の良心のありかを探っている様は、私に先程の憎しみとはほど遠い、彼への親近感を湧かたせた。

私は本の題名である「海と毒薬」の「海」は世の中、「毒薬」は自分の良心を失い、世間からの眼や罰のみを恐れる考えだと解釈した。現在海は毒薬に満ちており、毒薬に侵された人も多い。私が勝呂の立場にいても、きつと参加を断ることはできなかっただろう。私も毒薬に蝕まれているのだ。この現状から抜け出すには自分が貫き通せる良心、即ち「解毒薬」を生み出すことが何よりも必要だ。体裁や保身のためだけに生きず、悪は悪であると断言できる勇気を持ちたいものだ。そんな心を皆が持つことができれば、どこまでも澄んだ「海」が広がっているだろう。そんな海を目指して、生き方を変えていこうと思う。

## 星の王子さま

サン＝テグジュペリ 著

建築学科一年 丸川 泰世

大切なものはどこにあるのか

——「星の王子さま」を読んで——

「みなさんの大切なものは何ですか？」と聞くと命とか家族とかお金とか、いろいろあると思います。ですが、本当にそれだけなのでしょうか。友達からもらったプレゼントは確かに大切だと思います。しかし、他にもまだあるはずです。物理的に物ばかり見ていては気づかないものです。初めの質問に具体的な物品などばかり考えていた私の考え方が変わった本が、「星の王子さま」です。この本は、絵本のよくなものから、詳しく書かれたものまでであるため、大人から子供まで幅広い年代で読まれています。私がこの本を選んだ理由は、両親に一度は読んだ方が良くとすすめられたからです。初めてその本を手にしたときは、本のタイトルからはその内容がまったく分からないと感じました。

話のあらすじとしては、人も町もなにもない砂漠の中に飛行機で墜落してしまった主人公の前にある時突然、王子さまが姿を現します。そして、王子さまは飛行機を主人公が直している間に、地球にたどり着くまでの出来事を話して聞かせるというものです。読んでみると、タイトルからではとても想像できないほど深く考えさせられるお話で、これまで読んできた作品の中で最も心打たれる作品だと感じました。

この作品のおもしろいと感じたところは、始めは何も知らず、教えてもらってばかりだった星の王子さまが、星を旅していく毎にかしこくなっていき、考えることや、使う言葉が難しくなっていくたりして、王子さまと一緒に旅をしながら、同時

に成長していく様子が感じられるところです。また、花などの植物や動物が王子さまと一緒にしゃべるシーンでは植物や動物たちにも意思があり、生きているのだということを出させてくるような書き方が非常に面白かったです。

そして、私がこの作品を読んで学んだことは、「本当に大切なものは目に見えない」ということです。この言葉は作品にも何度か登場していました。私は最初、目に見えないものと言われたとき、それは優しさや友情、きずかななどを意味しているのだろうと思いました。この言葉を見たとき、おそらく大半の人たちが、私と同じような事を考えたと思います。確かにこれは間違いではないと思います。しかし、読み進めていっていると、王子さまは、

「星があんなに美しいのも、目に見えない花が一つあるからなんだよ。」

「砂漠が美しいのは、どこかに井戸をかくしているからだよ。」

と仰うのです。そこで私は、目に見えないのは優しさとかもそうですが、そのものの裏側のことです。それを心で感じるのが大事なのではないかと思いました。つまり、夜に星空をながめるとき、何も考えなければそれはただの星です。何十億とある星となにも違いません。しかし、その中にある一つの星に宇宙人がいると思ってみると、星空をながめるのが楽しくなり、それまでそこら辺の星と変わらなかった星がその人だけに違う特別な星として見えるということになります。そして、星にいる宇宙人は本当にいるのか分かります。もちろん見えていないからです。大切なものは目に見えないとはそういうことなのではないかと思えます。この考え方は日ごろの生活でも活かせる場面はいくらでもあります。学校の校舎が古くてボロいなと思っても、ろう下にゴミ一つ落ちていないのは清掃員さんのおかげだと考えると、校舎は輝いて見えると思えます。

このように、見えないものを意識することによって見方が変わりもつとよく見て考えられるようになると思います。そして、大切なものは私たちそれぞれの心の中にあるのではないかと私は考えています。



## 沈黙

遠藤 周作 著

建築学科一年 宮本 知輝

神とは何か

——「沈黙」を読んで——

なぜ、人はいないであろう神を信じるのか。私は宗教というものに初めて触れたときから、この疑問を心の中に抱き続けていた。

それは、私がこの本を手にとった動機の一つである。神を信じ、救いを求める信仰者の心理を知りたいという好奇心も自身にこの本を手にとるように煽ったのである。

神など存在しないのではないか。主人公ロドリゴは、司祭という立場でありながらも、これに似た問いが頭をよぎったのだ。当時の日本では、キリシタンを取り締まり、迫害していた。そんな厳しい状況において、ロドリゴは、海を渡り、キリスト教の信仰を通して、民を救うためにやってきた。しかし、日本に来てから、キリストを信仰していた民が、次々と役人たちに見つかり、拷問や処刑をされる。こんなにも民が苦しんでいるのに、神は何もしてくれないということに、ロドリゴは気づくのだ。

それは、私にとつて至つて普通なことであつたが、キリストを信仰している者は違ふのだらう。ロドリゴは、途中こんな選択を迫られる。自分がキリスト教を棄教するか、民に拷問で苦しみ続けさせるか、というものだ。私はもちろん棄教する方を選択する。民が苦しんでいる姿を見ていられないからだ。しかし、ロドリゴは、棄教せず、民が神に救われるよう祈つたのだ。ロドリゴの信仰を貫く姿勢には、感動した。しかし、その決断の裏には、苦渋という言葉が張り付いていただらう。こ

の選択がまた、「神など存在しないのではないか」という疑問に繋がる。

「お前たちの痛さを分かつたために十字架を背負つたのだ。」ロドリゴは、最終的に棄教することを選ぶが、彼が踏み絵に足をかけたときに聞こえた言葉だ。あの疑問の答えには、たどり着けなかったが、ロドリゴは、神の存在意義を知つた。神は直接手を差し伸べてくれるわけではなく、痛みを分かち合うために存在しているということを知つたのだ。私は、そこそが宗教の本質であるのではないかと考えた。痛み、苦しみ、悲しみを共感してほしいという欲求から神という偶像が作られ、それが、宗教となつたのではないか。自分達が崇拜していたのは、ただの偶像だったのかもしれない。ロドリゴもこのようなことを考えたはずだ。だから、最終的に、彼は今までとは違つた形で神を信じ続けたいと考え、棄教したのであらう。彼をとり巻く状況はとても過酷なもので、心身ともに苦しいことばかりであつた。彼は痛みを分かち合う何か欲しかった。それは、私だけでなく人間が皆欲しいものだ。辛い時、悲しい時、苦しい時そつと心に寄り添ってくれる人は大切なのだと実感した。その存在が現実になかつた彼は、本当に苦しかったであらう。しかし、彼は、踏み絵をする前のあつた一言で救われたのだと思う。彼の心の中の神の一言で。

私はこの本を通して、「なぜ、人はいないであろう神を信じるのか」という疑問の答えを一つだけ見つけることができた。それは、痛みを分かち合う何か欲しかったからだ。人間が生命をつないでいる間、時代は変容し続けた。ただ、いつの時代にもあつたのは、痛みである。それを紡いできたのは、宗教や神である。これが、この本を通して、ロドリゴを通して、私が感じ取り、考えた宗教や神の形である。

しかしながら、私は神を信じていない。誰が、心に寄り添ってくれるのか。それは、身近にいる家族、友人だらう。私は、この本では直接そのようなことを語つてはいないが、より一層身近な人を大切にしようと思つた。その人達が痛みを感じている時は、救つてあげたい。時によつて、救われるだらう。なぜなら私の心の中に神はいないからだ。

## 優 秀 賞

2年生の部

## ロミオとジュリエット

ウィリアム・シェイクスピア 著

環境都市工学科二年 唐木田 啓伍

本物の恋の形とは

——「ロミオとジュリエット」を読んで——

この作品は、互いに愛する二人の若者の物語で、その二人は最終的にどちらも亡くなっている。このように二人は暗い結末を迎えてしまうわけだが、ではなぜハッピーエンドではないこの物語が恋の代表作としてあるのか、僕なりに考えてみた。

まず二人の人物像についてだ。ロミオは、ある一人の女性に恋をして悩んでいた。周りの人の意見も聞き入れないほどにだ。しかし、キュピレット家のパーティでジュリエットを見た途端、一目惚れしたのである。そしてジュリエットと踊り完全に恋に落ちた。これを見て分かる通り、ロミオは意外と軽い性格であるというのが分かる。対してジュリエットはというと、十四歳という若さではあるが、とても賢い女性である。それが分かる場所として、パーティの夜の夜にバルコニーでそれぞれの「名前」について深く考えている場面から分かるだろう。名前とその物体は同じものではなく、別のものであるということをおの若さで発見したのである。気づく人もいるかも知れないが、ほとんどの人は気づくこともないだろうし、僕自身もそのようなことは考えもしなかった。これらからいうと、ジュリエットは相当賢かったということが分かる。

この二人の人物像が分かったところで、もう少し探っていこう。次に考えられるのが、ロミオの国外追放からジュリエットに会いにくる場面である。ロミオはジュリエットの従兄を殺してしまい、裁判の結果国外追放の刑にされてしまう。二人は別れてしまうのを悲しむが、別れないとロミオは殺されてしまうので別れることとなる。ここまででは考えたことがある。それは、ジュリエットの考えでもある名前とその物体は別のものであるというものだ。この時点でその名を捨て一人の男と女としてこの国を一緒に出ていたらもう少し明るい未来も待っていたのではないかと感じた。しかし、実際はそのようなことはせず、ロミオが一人で追放という形で国を出ていった。その後、ジュリエットが薬を飲んで死んだ状態というのを聞きロミオはジュリエットに会いに行く決意を固める。僕はこの場面でロミオは、ロミオとしてではなく一人の男として会いに行つたのではないかと考えた。なぜなら、これがジュリエットに会える最後のチャンスで、最後にはそのままの自分を見せようとしたからだと思つたからである。最後に、自分が愛した人にあるままの自分の言葉を伝えることで、彼は自分の愛を彼女にぶつけてあの世へ旅立つたのではないかと、僕は思つた。そしてその後ジュリエットが目覚まし、毒を飲んで亡くなったロミオに対し、彼女も一人の女として愛した人に最後の言葉を伝え亡くなったのではと考えた。

ここまででこの作品がどういふものかを確認したが、文の最初での疑問、なぜ恋の代表作なのかというもののへの僕なりの答えとして、彼らは本当の自身、つまり本質を見て恋し、互いに愛していたからなのではと思つた。彼らは性格などでいえば対照的で、一見合わないと思われるし、家同士も敵である。ではなぜ結果的に結ばれたのか。それは、ジュリエットの発言でもあった、名前とその物体は別のものであるというのがキーポイントとなるだろう。普通は気付かないのだが、この二人はこのことに気付き、たとえ敵であっても関係なくその人のことが好きなのだという真つすぐな気持ちがあったからこそ、二人が亡くなったとしても、多くの人々が共感し、これこそが本物の恋なんだと思つたのだと思う。

以上のような考えから、この作品は悲劇でありながらも、多くの人から恋の代表作として称賛されているのだろうと僕は思つた。

## 令和2年度 校内読書感想文コンクール 講評

### ○令和2年度選考委員

一. 二年選考担当 外村 彰

三年選考担当 木原 滋哉

一. 二年選考担当 上芝 令子

委員長・四年以上選考担当 田中 誠

### 読書感想文 総評

図書館長 電気情報工学分野 田中 誠

今年度はコロナ禍によって、始業式からわずか4日で休校になり、学校としても初めての取り組みである遠隔授業が実施されました。6月から徐々に登校日を設け、実験実習が再開されましたが、座学まで対面授業となったのは9月末の前期末試験の答案返却からでした。また図書館は昨年度始まった改修工事が長引き、開館は後期からになりました。

このような異例づくめのなか、1年生の皆さんは例年通り夏休みの課題として、全員に校内読書感想文コンクールに応募していただきました。2年生以上は自由応募となり、2年生から2名が自主的に取り組み、プラス1名の計3名から応募がありました。ご応募頂いた皆さん有難うございました。

一方、残念ながら3年生以上の応募はありませんでした。昨年度までは3年生まで全員が応募していたので、「図書だより」の最優秀賞、優秀賞の掲載が大幅に減ることになりました。来年度には状況が改善し、応募者が復活することを願っています。



## 一・二年読書感想文 講評

人文社会系分野 外村 彰

今年度は前期が遠隔授業となり、小テストや教科書の音読、書き込みといった対面形式では普通に実践できていたことすらままならない状態で国語科の講義も推移しました。そんななか、読書感想文を夏休み課題とし、後期はじめに提出してもらったのですが、やはり学生の皆さんの力作が揃ったのを見て、あらためて心強さを感じた次第です。

課題図書を提示し、書き方のコツは、主人公の立場にわが身をおいて、自分だったらこう考え、行動した……と思いながら、またその作品を通して発せられた「問い」で始め、その「答え」を自分の最も心うたれ、共感したことと締め括るよう構成を考えながら、まとめることだよと（リモート授業で）伝えたことを思い出します。

一年生を書いてくれた文章を、今年度は国語科の上芝先生と二クラスずつ分担して読み、あとでつき合わせ、バランスを考慮したうえで、各々の評価をしました。芥川賞受賞作、所縁ある作家のほか、海外の名作小説も含めて推薦しておきましたが、例年の傾向通り「星の王子さま」「人間失格」「銀河鉄道の夜」が多く、定番化している感（個人的には食傷気味でも、学生達には新鮮な対象作なので、初心に還って読んではいませんが）を強くしました。

一年生とあわせ、二年生についても当初は、例年通り提出してもらう予定でしたが、コロナ禍の現況も鑑みて、今年度に限り任意（自由課題）扱いとし、結果的に三人が書いて来てくれました（彼らには特別に参加賞をあげたくらいです）。該当学生達には、ここでまた深謝の意を伝えたく存じます。

優秀作に選んだ皆さんには、しっかり自己を見詰め、素朴でも人生を熱く問おうとの真摯な姿勢が存していました。——読書は多様な人生の様相を所謂「準体験」する行為です。そこで思考し、表現し得たことは、実人生にも何らかのプラスとなることでしょう。

さて読書感想文に限らず、よい文章の根底には何があるか。そこには「感動」があります。感動とは、対象から自己を見出すこと。おもしろかった小説のなかには、それまで気づかなかった自己が潜んでいるもの。「感動」の本質は、自己を発見する喜びです。それが熱量ないし動力となって書かれた文章だからこそ、読む人の心に響くのです。

そうして皆さん、いつか大人になった折に、今回読んだのと同じ作品を読み返してみてください。再読してみた時、過去の自分の「読解」との対話をし、自分の心の今の在りかをあらためて知る経験をするはずです。読書の効用の一つには、さような自己再見もあります。

ちなみに、原稿用紙の書き方が、まだ習得されていない人が複数名みられたのは気にかかりました。文末に「だった」と書く際、最後の一マスに「だっ」と書いたり、行末の句読点を行頭に配したりといった例がなくなることを念じます。

なお、原稿用紙をホッチキス止めして提出した人が多かった（それはそれで構わない）のですが、本来は、四百字詰用紙なら山折りにして、表裏の上段に配された下線部にページ数を書き、二カ所穴を開け、紐（こより等）を通して結び、簡易製本のかたちにするのが正式な綴じ方です。覚えておいてください。

## 読書のすすめ

### 【フィクションに必要なのはリアリティである】

機械工学分野 水村 正昭

私はフィクションが好きです。フィクション好きな方は分かっていると思うが、その醍醐味は疑似体験にある。通常の生活ではあり得ないような設定の主人公に自分を当てはめて活躍するのである。年齢、性別、時代、職業などを一瞬で飛び越えることができ、時には正義のヒーローや悲恋の少女になり、逆に極悪非道な鬼畜になることもできる。

その疑似体験する上で必要な条件はリアリティである。フィクション（作り話）に必要なのがリアリティ（現実性）というのは一見矛盾するように思うが、そうではない。通常の生活では起こり得ないことを体験したいのだが、あまりにも非現実的すぎると冷めてしまう。恋愛ドラマであつたら、「意外とこんな出会いがありそうかも」と思わせると、その世界に入りやすい（実際にはそんな出会いはほとんどないのだが）。そんなリアリティを感じさせるかどうかは作り手の腕の見せ所である。まったく架空の話のSFも同じである。作り手の腕が高ければ、あり得ない話があり得るように思えてくる。もう20年以上前のベストセラー小説に「パラサイトイブ」がある。ストーリーを一言で言うと、ミトコンドリアが人類に闘いを挑む話である。これだけ聞くと、実にくだらない幼稚な話を想像するかもしれないが、実際に読んでみると、かなりリアリティがある。実は、この小説の作者の瀬名英明氏は、本業が小説家ではなくて東北大学の薬学部の研究者であり、まさしくミトコンドリアの研究を行っていたのである。理系の方はかなりはまると思うので一度読んでみることをお勧めしたい。

さて、ここまで広くフィクションに関して話してきたが、フィクションの中でも一番リアリティを感じられるのが小説である。映画やTVドラマのように、視覚に訴える動画の方がリアリティはあると感じられるかもしれないが、意外とそうではない。小説は映像がない分、自分の頭の中で登場人物を作り上げることができて疑似体験しやすいのである。書き手も、映像がないことを補うために、情景や設定、さらには、その時その人物がどう考えているかなども細かく描写してくれる。下手に映像があると、一方的にあるイメージを押し付けられるため想像が制限されてしまうのである。

昨今、若い人の活字離れが問題視されているが、映画やTVドラマなどが好きな方は、騙されたと思って小説を読んでみてほしい。小説の方が断然面白いです。漫画が好きな方は活字には若干慣れているはずなので、あともうちょっとです。是非、小説も読んでみてください。

## 【英語のルーツをたどる】

人文社会学系分野 周 躍

あなたは言葉を使う時に、その由来または根源について考える派ですか。

英語の歴史は、西暦5世紀ごろ、もともと北欧のユトランド半島(Jutland)に住んでいた Angles と Saxson 族のブリテン島移住から始まったと言われていています。その後、北欧海賊(Viking)の襲来や、ノルマン征服(Norman Conquest)、百年戦争(Hundred Years' War)、さらにはルネサンス(Renaissance)や産業革命(Industrial Revolution)など、様々な出来事を経験し、今の形になりました。

現代英語はゲルマン系言語の構造を保っているながらも、語彙の半分以上がラテン系のもので、さらにはギリシャ系や北欧ゲルマン系のもので、さまざまな借入語が入っているため、たくさんの類義語と同義語があります。とはいえ、英語はヨーロッパ諸言語と比べて、はるかに勉強しやすいと言われていています。例えば、同じゲルマン系の現代ドイツ語は古ドイツ語の複雑な要素を多く残しているのに対して、現代英語はすでに古英語とは別の言語と言えるほど、進化してきました。その進化は複雑な語尾屈折を伴った総合的な言語から、比較的単純で分析しやすい言語への道です。それもあって、英語は小さい部族の方言から、世界共通語へと変身を遂げました。

もちろん、そのような歴史を知らなくても、英語はうまくできます。ただ、それらを知っておいたら、英語勉強が間違いなく、より楽で、楽しくなります。例えば、単語の構成や語源に詳しい人なら、先日アメリカの国会議事堂(the Capitol)で行われていた大統領の就任式(inauguration)をローマの建国者 Romulus の戴冠式と重ねることができ、より深い面白見方ができるでしょう。古代ローマにおいては、重要な国事を執行する際には占い(その中でも、鳥の占いが特に盛んでした)を行う風習がありました。Romulus の戴冠式でも例外ではありませんでした。実際に、inaugurate (就任式の動詞形)はもともと「to take omens from the flight of birds」(鳥の飛び方による占いの意味)でした。また、「the Capitol」はローマのCapitoline 丘上にある全能の神 Jupiter (ギリシャ神話のゼウスにあたる)の神殿をも指すことができ、大統領の就任式および国会議事堂の重要性をまた違う側面から理解することができました。

英語の歴史を知ることはその言語に対する理解が深まることを意味します。その理解は確実に皆さんの力になると思われまます。接頭辞 au/av-がラテン語 avis (鳥) の変化形だと知っていたら、augury ((鳥) 占い)、aviator (飛行士)、aviation (飛行; 航空; 航空産業)、または aviary (野鳥用の大きな鳥小屋) などを関連づけながら、効率よく覚えていくことができるでしょう。また、何も考えずに、go の過去形は went で過去完了が gone を覚えるより、wend と go が共存していた時代を知り、suppletion (補充法)により、wend の過去形が go の過去形になったことを知った方がより納得がいくでしょう。さらに、ブリテン島に存在していた各方言を知ることで、child の複数形の謎が解け、ノルマン征服とルネサンスの影響を知ること、doubt, debt 中の「b」のような、綴りには必要だが、発音されない文字の存在意義をも理解できるでしょう。

英語の発展を知った人は、自分の母語にある同じような現象にも気づきます。そして、彼らは経験を捨て、弁証的に考え始めます。なぜ「子供」の「供」は複数を意味するのに、「子供」は単数形なのでしょう。なぜ、「和泉」の「和」や「五右衛門」の「右」のように書くけど読まない字があるのでしょうか。なぜ「山茶花」の読みは「さんざか」ではなく「さざんか」なのでしょう。このような考え方は、間違いなく皆さんの財産になります。

さて、いろいろと紹介しましたが、英語の歴史を知るのにはどの本から入ったらよいでしょう。わたしのおすすめは梅田 修先生の『英語の語源物語』(大修館書店, 1985)です。(上の実例の一部がこの本より引用したものです。)この本は英語の語彙の発達史を分かりやすく説明した上、「語源のロマン」と「語源物語への案内」の二部構成で、予備知識なしでも理解できる内容になっています。是非手にとってみてください。

## 【十四日間の積読】

自然科学系分野 堀内 遼

近頃は先生と呼ばれてしまう御身分になって学生の皆さんに数学を教えるのが新しく私の仕事となったので、自分が学生の頃に読んでいた本で数学を学び直しています。もしかしたら、数学なんてものは私にとっても当然難しいのに、それをさも先生は何でも知ってますよ、みたいな顔をして学生の皆さんに教える時のぼつの悪さを少しでも和らげようとしているのかもしれませんが。人の話を聞くより自分で勉強したいタイプの学生の時間を自分の講義が奪っているかもしれないという申し訳なさはどうせ和らげられない気もしますが。

学生の頃の私は、卒業のための単位は一通り掠め取ったものの、数学の理解に関してはひどい有様で、例えば「いい感じの複素関数はなんか諸々一致するらしい」とか「群の作用は単純推移的なのが最強っぽい」くらいの認識で平気な顔して数学科の学生をやっていたと思います。一応見栄を張っておくと、自分が数学をよくわかっていないということはわかっていたつもりです。しかしこんな学生でも単位は取れるし、なんなら博士号も取れるみたいです。皆さんもどうですか、数学の博士号。

あれから十年余り、関数論には全く触れてこなかったし、群の作用もごく簡単なものしか扱ってこなくて、学んだことはほとんどすっかり忘れてしまっていました。しかし今、十年以上積んでおいた数学書を読み返してみると以前よりずっとよくわかる。例えば、ここで写像をちゃんと定義するためには作用の単純推移性は外せないな、とかが特に考えなくともわかったりします。おまじないのように見えていた仮定が論証のどこにどう効いてくるのか、そしてそのことによって新たにどのようなことを狙っていけばよいのか、言ってみれば理論の組み立て方のようなものが、十年前に比べればですが、よく見えている気がするのです。これは嬉しい驚きで、今読んでいる難しい論文たちも十年後にはサクサク読めるようになるのかなと期待してしまいます。

では十年前の自分はどのように数学書を読んでいたのでしょうか。確かに結構頑張って読んでほしいし、小さな行間などは自分で埋めたりもしていましたが、全体としては臆気で、何か大事そうなキーワードらしきものだけ拾い集めているといった感じだった気がします。ほとんど何もわからないなりに本当に少しずつ何かしらを自分のものにしていくということ、きつとずっとやっていたのでしょうか。多分今の学生の皆さんも似たようなものなのではないでしょうか。

数学は積み重ねの学問なので基礎からやっていくべしという人もいますが、私は好きにやればよいと思っています。むしろ、基礎と名付けられた数学があつて（あるいは基礎という言葉の好きな人がいて）そしてその基礎から数学が始められてしまうということが、フォン・ノイマンのいうところの“abstract” inbreeding への第一歩という気もするし、それぞれの暮らしの中で出会う重大事（それは普通すごく複雑でしょう）から始めて、ひとりで頻り頑張った後に整備された学問的蓄積の力を借りるという数学者がもついてもいいのでは、と思うこともあります。いずれにせよ、学校のテストで良い点を取れなかったら数学に興味を持ってはいけないなんてことはないはずですよ。

翻って、呉高専の図書館には沢山の本があります。ぜひ学生の皆さんには図書館に来て本棚を眺めてみてほしいです。きつと何かピンとくる本が見つかると思います。難しく読めなさそうだったり、なぜ惹かれたか自分でもわからなかったりするかもしれませんが、とりあえず借りるだけ借りてみてください。私の経験から言うと、それを自分の部屋に置いておくだけでも結構勉強になります。もしそれが数学の本で、何かわからないことがあった場合は遠慮なく質問しに来てください。喜んでお応えしますし、ご興味があれば私の持っている数学書も紹介できます。

なお、呉高専の図書館の授業期の貸出期間は十四日間だそうです。お忘れなく。

## ～図書館からのお知らせ～

### 貸出回数上位ベスト20

順位	題名	著者	回数
1	3級機械設計技術者試験過去問題集	日本機械設計工業会	51
2	平成30年度版;機械設計技術者試験問題	日本機械設計工業会	15
3	編入数学徹底研究	桜井基晴	11
4	リスニング編;公式 TOEIClistening & learning トレーニング	Educational Testing Service	10
4	TOEIC L&R テスト至高の模試 600 問	ヒロ前田,テッド寺倉,ロス・タロッグ	10
6	機械設計技術者のための基礎知識 第6版	機械設計技術者試験研究会	9
7	大学編入のための数学問題集	碓氷久[ほか]	6
7	クトゥルフ神話 TRPG	サンディ・ピーターセン[ほか]	6
9	集合への30講	志賀浩二	5
9	通信工学通論	畔柳 功芳, 塩谷 光	5
9	赤い指	東野圭吾	5
9	十角館の殺人	綾辻行人	5
9	平成29年度版;機械設計技術者試験問題	日本機械設計工業会	5
9	編入数学過去問特訓	桜井基晴	5
9	1;公式 TOEIClistening & learning 問題集	Educational Testing Service	5
9	機械設計技術者のための基礎知識 第9版	機械設計技術者試験研究会	5
9	リーディング編;公式 TOEIClistening & learning トレーニング	Educational Testing Service	5
9	1%の富裕層のお金でみんなが幸せになる方法	クリス・ヒューズ	5
9	暴虎の牙	柚月裕子	5
9	Vol.6;TOEIC テスト新公式問題集	Educational Testing Service	4

(調査対象期間：令和2年10月5日～令和3年2月5日)

#### 【表紙写真撮影者コメント】

いつも通る道を見てみると夕焼けがきれいだったので、夕焼けをメインに写真を撮ってみました。そのため、周りの木や建物などは影になるようにしていました。

(機械工学科1年 神本彩花)

#### 編集後記

新しくなった図書館、もう利用いただけただけでしょうか。以前とは変わったところも多いですが、これまで通り学生・教職員の皆様に気持ちよくご利用いただけるように努めていきますので、よろしく願いいたします。